

難波など畿内に搬入された他地域産須恵器—有文当て具痕跡を基にして—

寺井 誠

本稿は、内面に残る当て具痕跡を基にして、難波など畿内に搬入された他地域の甕・壺などの須恵器容器類を見出し、古墳時代後期～奈良時代の地域間交流を研究するための初歩的検討である。

筆者は以前より難波を舞台とした交流を考古学的に明らかにすることに関心をもち、6～7世紀の朝鮮半島の土器や北部九州の須恵器の特徴を見出すことによって、対外交流や国内の他地域との交流について検討してきた（寺井 2013 など）。この研究を進めるためには、交流対象と推定される地域、すなわち「故地」の考古学的検討は必要不可欠であるが（寺井 2016・2017・2019 など）、ある特定の資料から見える地域間交流は、あくまで地域間交流の一面を示しているに過ぎないということも留意しなければならない。例えば、古墳時代の甗は百済・馬韓からの影響が強い一方で、初期須恵器については加耶の影響が強くみられるのは、選択的に異なる故地の文化要素を導入していると考え（寺井 2018a）。最近行われたシンポジウム『飛鳥時代の土器編年再考』（奈良文化財研究所編 2019）では、須恵器杯の研究の進展により飛鳥・藤原に猿投産など多様な地域の製品が搬入されていることを明らかにしたが、異なる器種を基にすれば違った傾向が窺えるかもしれない。

そこで本稿では、杯類とは異なる視点で地域間交流の可能性を探るために、須恵器甕・壺など容器類の内面に残る「有文当て具痕跡」に着目する。一般的には同心円文の当て具痕跡が思い浮かぶが、実際に一部の地域では同心円文以外の有文当て具及び当て具痕跡の存在を確認している（寺井 2019, p134）。ここでは難波を含めた畿内で確認できた同心円文以外の有文当て具痕跡をもつ須恵器を紹介するとともに、他地域での類似資料を紹介し、故地を模索したい。扱う時期は主として古墳時代後期から奈良時代（おおむね 6～8 世紀）を対象とするが、一部平安時代初頭（9 世紀初頭）も含めることとする。

1. 各地の資料の紹介

1) 難波（上町台地とその周辺の低地）

平行文当て具痕跡を残す須恵器甕もしくは壺は大坂城跡 OS99-16 次調査地（大阪市天王寺区）の 2-1～5、難波宮跡 NW13-6 次調査地（大阪市中央区）の 2-7 がある。2-1・2 についてはいずれも平行文が同心円文を切っていて、横方向の平行文が底部側に残る。他についてもいずれも底部側の破片であり、平行文当て具が底部の成形もしくは整形に使われたことを窺わせる。これらは北部九州の須恵器窯跡の調査状況から、旧国の筑紫の範囲のものと推定する（寺井 2019 など）。また、格子文当て具痕跡を残す須恵器甕もしくは壺 2-6 も同時期の北部九州にあることを確認している（寺井 2008）。これらは前期難波宮造営時の整地層などから出土していて、共伴遺物の下限は 7 世紀中葉である。

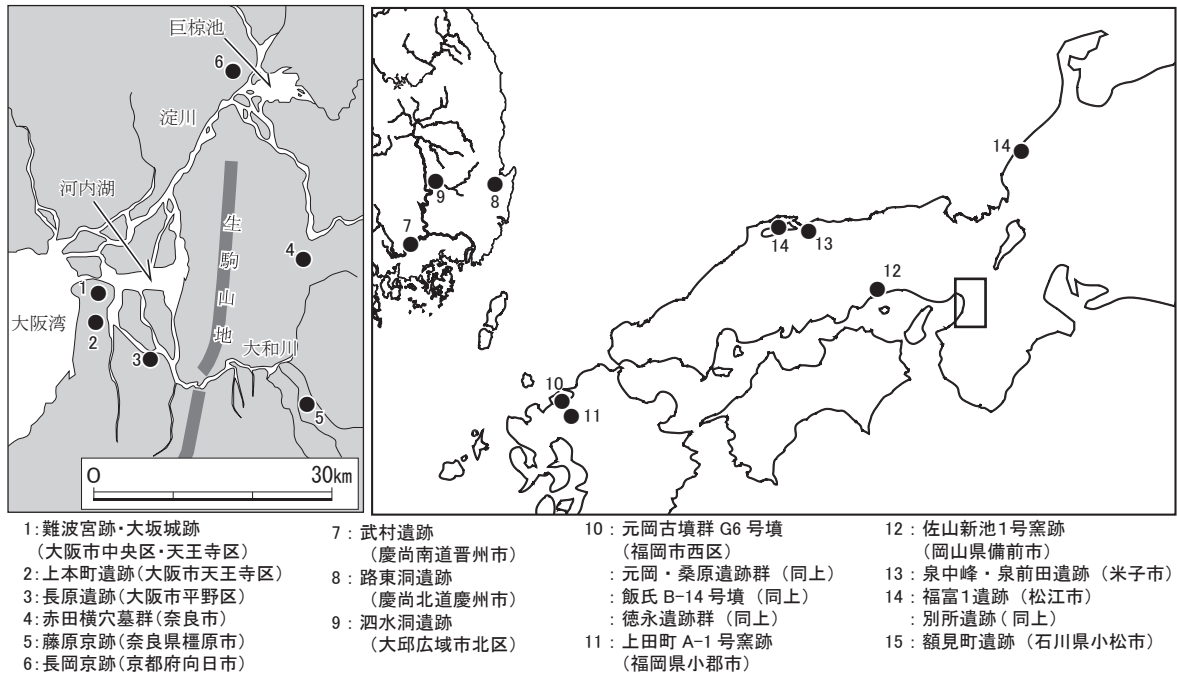


図1 本稿で取り上げる遺跡の位置

一方、難波宮から約2km南に位置する上本町遺跡 UH09-2 次調査地(大阪市天王寺区)では、扇状文・放射状文当て具痕跡が残る2点の須恵器甕もしくは壺 2-8・9 が出土している(大阪文化財研究所 2010)。2-8 は頸部から肩部の破片で、ほぼ同じ方向で上向きに開く扇状文が見られる。「小宮谷」と呼ばれる小規模な谷を埋める下層埋土から、8世紀前～中葉の土器とともに出土している。2-9 は胴部下半の破片で、放射状文が残る。「小宮谷」に架けられた橋脚 SB600 を設置する際の盛土から、8世紀前～中葉の土器とともに出土している。この2点の須恵器は色調がいずれも外面が灰色で、内面が橙褐色を呈するという点で共通するものの、同一個体か否かの確証はない。

2) 河内

長原遺跡北東部の NG97-43 次調査地(大阪市平野区)で内面に扇状文当て具痕跡が残る須恵器甕 3-1 が出土している(大阪市文化財協会 2000)。頸部から胴部最大径にかけて残っているものの、口縁端部は欠損する。報告の図では反転復元されていないため全体的なプロポーシオンがわかりづらいが、実物を見たところ胴部が中位で張り、頸部が窄まるものである。当て具痕跡は条線が太い扇状文で、放射状文に見える部分はない。第4b層という平安時代初頭を下限とする層からの出土である。

3) 大和

赤田横穴墓群(奈良市)の6号墓の須恵器甕 3-2 で平行文当て具痕跡が確認できる(奈良市教育委員会 2015)。報告では内面の上半に同心円文、下半に平行文当て具痕跡があると記されているが、実物観察したところ上半は同心円文の後、平行文当て具が使用されていた。平行文の密度については上半(3～4条/cm)の群が下半(3条/cm)の群よりもやや細かく、切り合い関係から下半の当て具痕跡の群が後であり、上下で異なる平行文当て具を用いているようである。なお、墓道で8

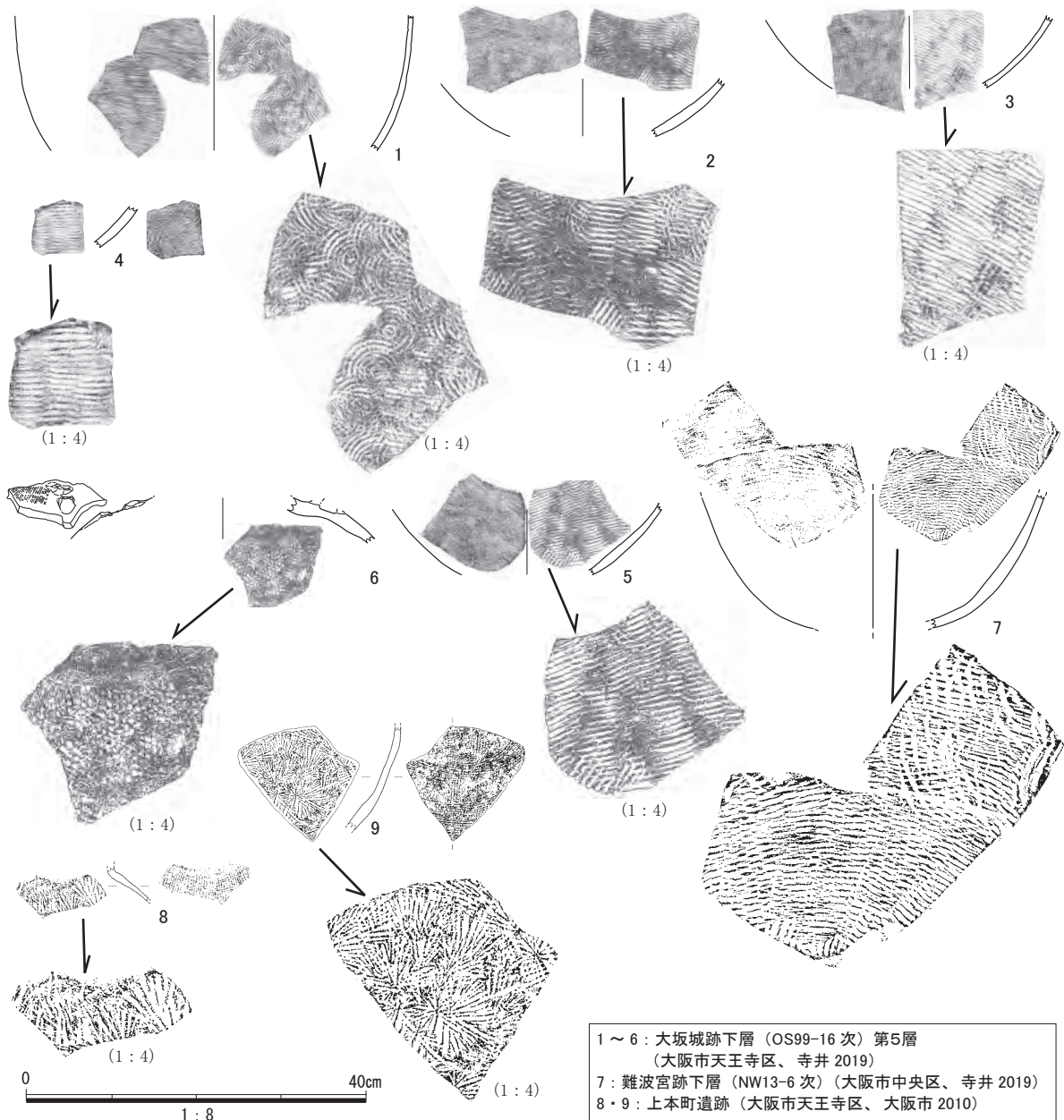


図2 上町台地の事例

世紀末～9世紀初頭の須恵器ミニチュア三耳壺が伴うものの、口縁端部が外側に丸く肥厚したり、カキメが多用されたりする特徴は6～7世紀のものと共通することから、横穴墓群存続期の6世紀後葉～7世紀中葉の間に収まるものと推定する。

藤原京跡82次調査（右京一条一坊、奈良県橿原市）で出土した須恵器甕3-3で、井戸SE8690の枠抜き取り穴から出土したもので、藤原宮期から奈良時代前半期、すなわち7世紀末～8世紀初頭の土器とともに出土した。（奈良国立文化財研究所1997）。外面には擬格子の平行文タタキが施され、報告では内面の当て具痕跡について「車輪文」とされているが、実物を観察したところ、平行文で一部では扇状文に見える当て具痕跡であった。切り合いが激しいためどちらなのか判別が困難であったが、同心円文ではないのは確かである。なお、当て具条線の凹部では木目が直交方向に

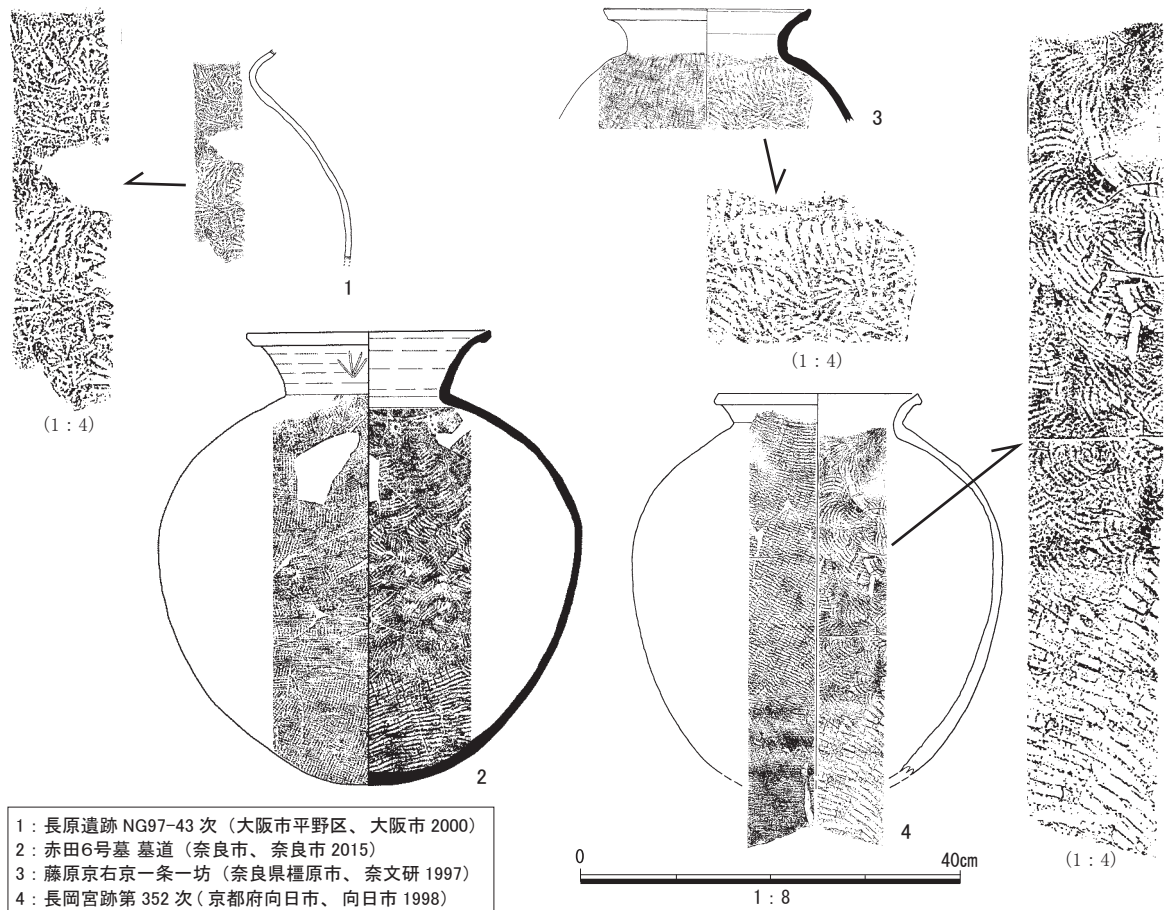


図3 河内・大和・山城の事例

残っていることから、木目に直交する平行条線を刻んだ当て具を用いたことがわかる。

4) 山城

長岡宮跡第 352 次調査 (京都府向日市) で出土した須恵器甕 3-4 で、長岡京期の溝 SD35209 から重圈文軒丸瓦などとともに出土していることから、8 世紀末頃と推定される (向日市教育委員会 1998)。外面には長方形の格子文タタキが施され、丸底の底部にのみカキメが施される。内面には胴部上半の同心円文を切って、密度が 2 条/cm と粗い横方向の平行文当て具痕跡が残っていた。

2. 故地と推定される地域

以上のように畿内で同心円文以外の当て具痕跡をもつ須恵器が複数点確認できた。管見による限り、陶邑など畿内の 6～8 世紀の窯跡ではこのような当て具痕跡の須恵器はまったく確認できていない。悉皆調査する必要はあるものの、現段階では在地産ではないと考える。

一方、他地域では同心円文以外の当て具を用いた須恵器の事例がある。例えば 6 世紀後葉～7 世紀の北部九州では窯跡や古墳・集落遺跡などで多くの平行文当て具痕跡の事例、少数の格子文当て具痕跡の事例が確認できている (寺井 2019 など)。特に、平行文当て具を用いた須恵器生産地 (窯跡) は宗像・飯塚・小郡・八女市といった筑紫の範囲でのみ分布している。内面の全面に平行文が

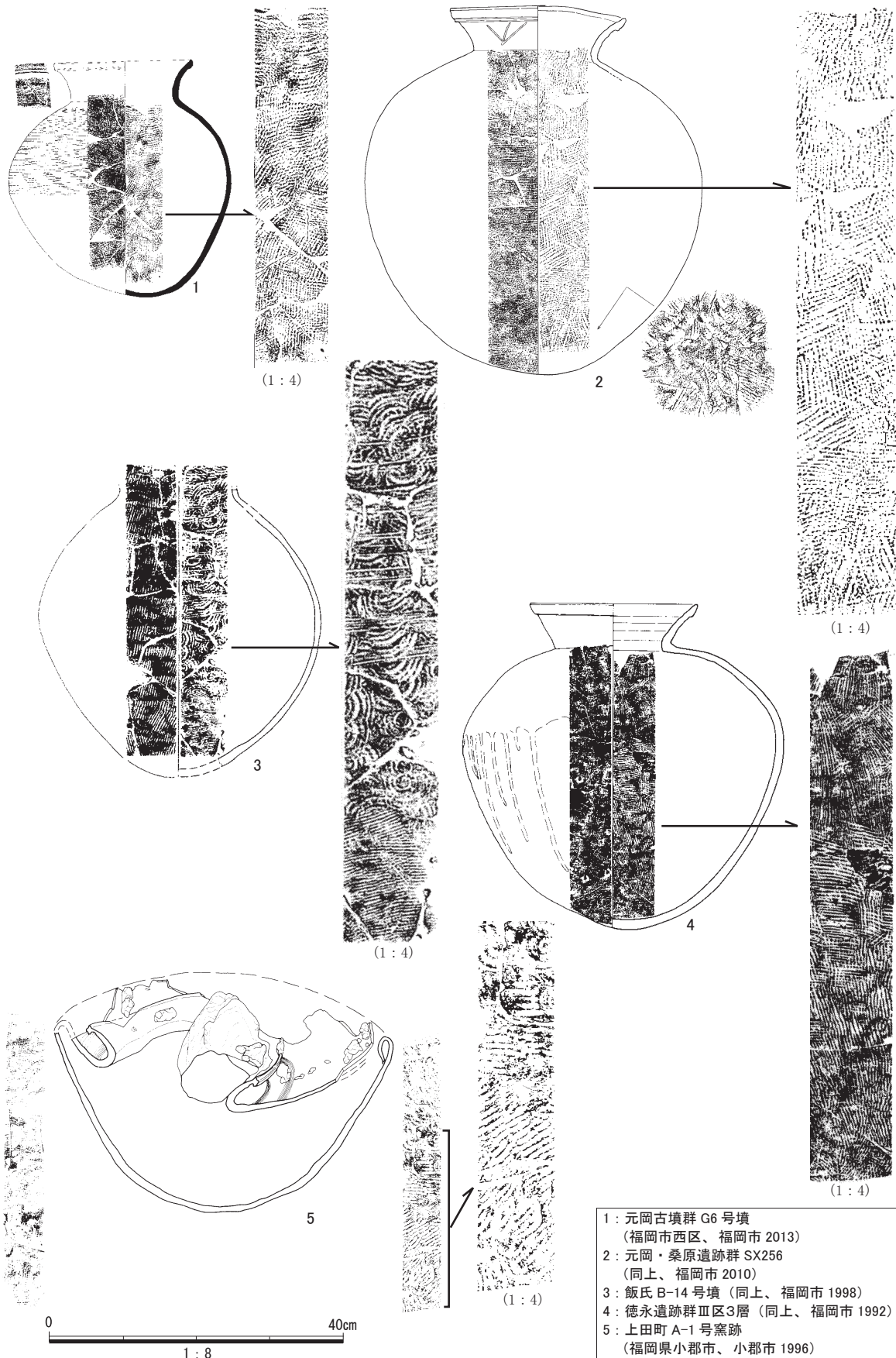


図 4 北部九州の事例

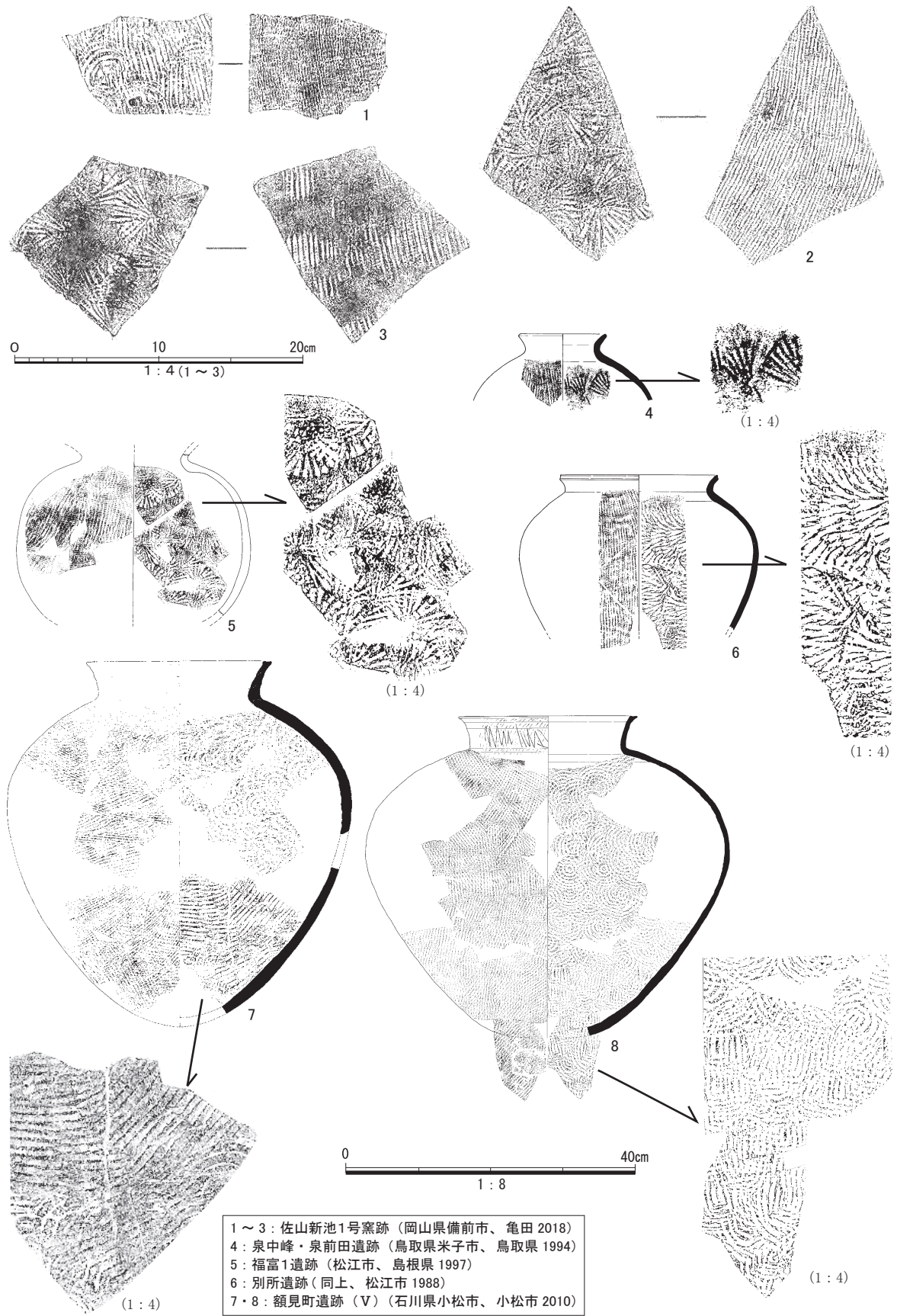


図5 吉備・山陰・北陸地方の事例

残る場合もあるものの、胴部下半にかけて横方向の平行文当て具痕跡が残るものが非常に多く、丸底化の成形の際に平行文当て具を用いたことが多かったことを窺わせ、それに用いたと思われる当て具原体も元岡・桑原遺跡群から出土している（寺井 2019）。前述の難波の 2-1 ～ 7、赤田 6 号横穴墓の 3-2 については、時期や特徴が共通することから北部九州からの搬入の可能性が高いと考える。対比できる事例は図 4 に掲示した。

一方、8 世紀代の平行文・扇状文・放射状文の当て具痕跡も畿内では一般的ではない。畿内以外では播磨や備前、山陰といった地域で扇状文・放射状文など、北陸で平行文などの当て具痕跡が比較的多く確認でき、事例を図 5 に掲示した（亀田 2018、望月 2006・2013）。扇状文・放射状文の当て具痕跡が残る上本町遺跡の 2-8・9 及び長原遺跡 3-1、藤原京跡の 3-3 は播磨や備前、山陰地方、長岡京跡の 3-4 は北陸地方の可能性を推定する。ただ、問題は時期である。これらは 8 世紀後半から 9 世紀にかけての事例であり、それより古いものは今のところ確認できていない。3-1 や 3-4 については時期的に問題ないものの、2-8・9 や 3-3 は故地と推定する地域より古くなるため、これらがどういった系譜なのかを明らかにするのが課題となる。

3. 今後の課題

以上、難波など畿内の同心円文以外の当て具痕跡を残す須恵器と取り上げ、その故地について簡単に検討した。6～7 世紀の平行文・格子文当て具痕跡については北部九州からの搬入須恵器として問題はないと思われるが、8 世紀代の当て具痕跡については、故地と推定される地域よりも古い事例があり、課題が残る。

特に、8 世紀代の同心円文以外の有文当て具の系譜については、北部九州での時期と空白があるため、どのような背景で登場するのか解明する必要がある。北陸地方の平行文当て具については底部側で多用するという点は北部九州と共通するものの、時期的には 1 世紀ほど空白があることも留意する必要がある。また、中央を経由せずに、統一新羅と日本列島の地方の関係によることも視点に入れておきたいが、現段階では共通点は見出すことはできていない。詳述することを控えるが、統一新羅の有文当て具痕跡については、同心円文以外にも平行文、格子文、扇状文、放射状文、矢羽根状文など多様であり、視野にはおいておく必要がある（図 6）。

さらには、当て具痕跡の多様性が何を意味するのかについて考えておかなければならない。例えば、9 世紀代の北陸地方でタタキ技法の変化に伴って、当て具に平行文や扇状文のものが多用されるようになるという指摘があり（望月 2001）、当て具の多様性は機能的な側面を示している可能性がある。また、時期は異なるにもかかわらず、北部九州や北陸で用いられる平行文当て具の多くは胴部下半側であることも、製作の過程での当て具の機能的な要因を思わせる。ただ、そうであれば放射状文や格子文にどのような意味が付与されるのであろうか、現時点の筆者に考えはない。内面に使う道具である故に、工人間という非常に限られた情報網で特定の当て具が拡がるということも考えられる。そうなると変化は緩慢となるとともに地域に定着しやすくなり、これが地域性を見出す足掛かりとなる。

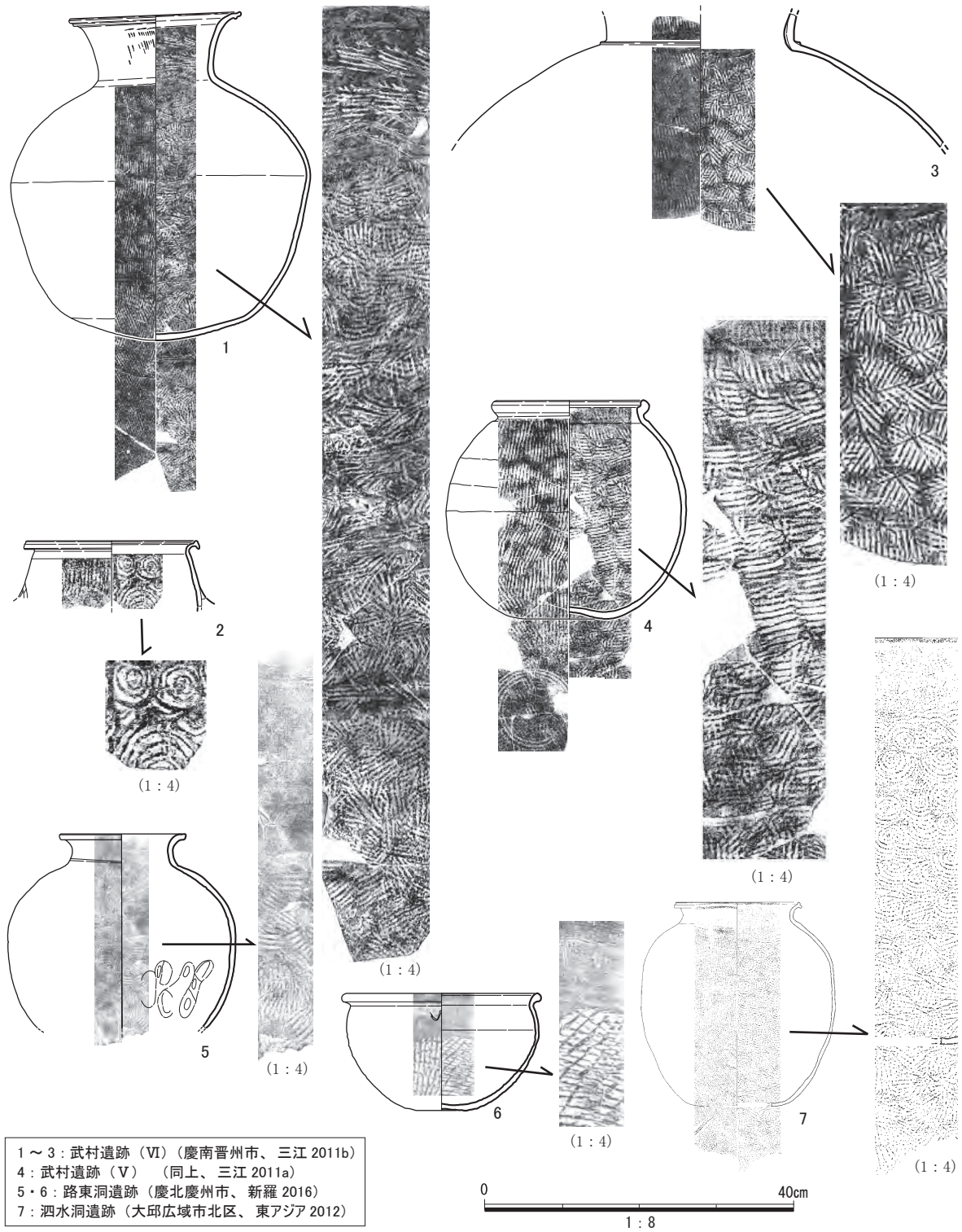


図6 統一新羅代の事例

以上、課題は多く残り、研究視点を含め、多くは手探りの状況である。当て具の多様性は実際に存在するものの、従来あまり検討の対象となつてこなかったのも事実である。今後多くの資料を観察し、検討を深めることによって、研究を進展させたいと思う。

II. 論 考

本稿を成すに当たり、下記の方々や調査研究機関に貴重なご教示を頂き、また資料調査の際にお手を煩わせました。記して御礼申し上げます（各五十音順、敬称は略させていただきます）。

稲田陽介、今井隆博、小田祐樹、亀田修一、小原貴樹、下濱貴子、杉本岳史、中島信親、中塚良、永野智子、原田憲二郎、松永悦枝、三宅和子、村瀬睦、望月精司、守岡正司、森川実、横幕真、渡辺博

小郡市教育委員会、小松市教育委員会、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、奈良市埋蔵文化財調査センター、奈良文化財研究所、福岡市埋蔵文化財センター、松江市埋蔵文化財調査室、向日市埋蔵文化財センター、米子市埋蔵文化財センター

大阪市以外の資料の調査については、JSPS 科研費 16K03175・19K01106 の助成を得た。

参考文献

- 亀田修一 2018 「備前邑久窯跡群の須恵器甕に関する覚書」『半田山地理考古』第 6 号 岡山理科大学地理考古学研究会、pp.73-96
- 寺井誠 2008 「古代難波に運ばれた筑紫の須恵器」『九州考古学』第 83 号 九州考古学会、pp.31-45
- 寺井誠 2013 「難波における百済・新羅土器の搬入とその史的背景」『共同研究成果報告書』7 大阪歴史博物館、pp.5-26
- 寺井誠 2016 『日本列島における出現期の甕の故地に関する基礎的研究』平成 25～27 年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書 大阪歴史博物館、ps.100
- 寺井誠（編）2017 『渡来人いずこより』大阪歴史博物館特別展展示解説図録 大阪歴史博物館、ps.150
- 寺井誠 2018a 「甕からみた渡来人の故地」『考古学ジャーナル』No.711、pp.15-19
- 寺井誠 2018b 「6～7 世紀の北部九州の土器に見られる新羅・加耶的要素－特に平行文当て具痕跡について－」『第 13 回九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学大会 海峡を通じた文化交流』九州考古学会・嶺南考古学会合同考古学会実行委員会、pp.270-285
- 寺井誠 2019 『渡来文化の故地についての基礎的研究－新羅・加耶的要素を中心として－』平成 28～30 年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書 大阪歴史博物館、ps.150
- 奈良文化財研究所（編）2019 『飛鳥時代の土器編年再考』、ps.246
- 望月精司 2001 「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『須恵器貯蔵具を考えるⅡ つほとかめのつくり方（北陸古代土器研究会 第 9 号）』北陸古代土器研究会、pp.27-52
- 望月精司 2006 「日本海地域の古代土器生産」『日本海域歴史体系第二巻 古代編Ⅱ』清文堂、pp.387-428
- 望月精司 2013 「須恵器甕の成形叩きに伴う当て具文様の意味－車輪文当て具と陶製当て具の検討から－」『白門考古論集Ⅲ 中央大学考古学研究会創設 45 周年記念論文集』、pp.171-196

日本報告書

大阪市文化財協会 2000 『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ』

大阪文化財研究所 2010 『上本町遺跡発掘調査報告Ⅰ』

小郡市教育委員会 1996 『荊又地区遺跡群Ⅲ』

小松市教育委員会 2010 『額見町遺跡Ⅴ』

鳥根県教育委員会 1997 『福富Ⅰ遺跡・屋形Ⅰ号墳』

鳥取県教育文化財団 1994 『泉中峰・泉前田遺跡』

奈良国立文化財研究所 1997 『藤原京右京一条一坊発掘調査報告』

奈良市教育委員会 2015 『赤田横穴墓群・赤田Ⅰ号墳』

向日市教育委員会 1998 『長岡宮跡第352次(7ANEYT-4地区)～朝堂院西外郭～発掘調査概要』『向日市埋蔵文化財調査報告書』
第46集

福岡市教育委員会 1992 『徳永遺跡(Ⅱ)』

福岡市教育委員会 1998 『飯氏古墳群B群第14号古墳 福岡市西区飯氏所在前方後円墳の重要遺跡確認調査』

福岡市教育委員会 2010 『元岡・桑原遺跡群16 - 第18次調査の報告2 -』

福岡市教育委員会 2013 『元岡・桑原遺跡群22 - 第56次調査の報告1』

松江市教育委員会 1988 『薦沢A遺跡・薦沢B遺跡・別所遺跡発掘調査報告書』

韓国報告書

東アジア文化財研究院 2012 『大邱泗水洞遺跡』

三江文化財研究院 2011a 『晋州武村Ⅴ - Ⅱ地区平地(1) -』

三江文化財研究院 2011b 『晋州武村Ⅵ - Ⅱ地区平地(2) -』

新羅文化遺産研究院 2016 『慶州路東洞12遺跡』